

『シッポの気持ちを聞いてみる』

著：高月まつり

ill：こうじま奈月

「俺……スーツ姿で自社製品を持って笑っていただければいいんですよね？」

雛山は汗をかいた手のひらを雪永に見せる。

「そんなに緊張してるのか。大丈夫だ、ちゃんとできる。綺麗な顔っていうのは、そこにあるだけで場が華やかになるからな」

「早く来ればいいのに、さっさと終わらせて帰りたい」

「俺は自社製品をめいっぱいアピールしたいな。特に俺が企画したヒット商品をな」  
雪永が自信満々に言ったところで、商品開発のメンバーが「会議室にお菓子を運んでおいたから」と言いに来てくれた。

女性ファッション雑誌のエディターは家系リスの女性だったが、カメラマンはガッシリとした体格の、家系ヒグマの男性だった。

どちらもある意味可愛いが、ロマンスが芽生えるような状況ではない。ついでに言うと、二人についてきたメイク係は家系クジャクの男性だった。

雪永は家系クジャクと会ったのは初めてだったので、「さすがはクジャクだな、いや、綺麗だ」と素直に感想を述べて、メイク係のお気に入りになってしまった。

「ほんと……雪永さんって可愛い。私、新人さんかと思ったら、雛山さんの先輩だなんて！その童顔を大事にしてね。可愛いわ」

童顔も可愛いも、雪永にとって地雷でしかなかったが、ここで怒って撮影を台無しにはできないので、ひたすら耐えた。

それに、今一番大変なのは雛山だ。

いくら美形だといっても、慣れないモデル撮影に四苦八苦している。

「もう少し自然に笑って」「新商品にワクワクする感じで」まではよかったが、「視線の先に恋人がいると思って」には顔を赤くして「え！」と聞き返した。

「それは、ちょっと無理」

カメラマンが求める自然な笑いがやっとできたと思ったのに、次に出されたのは難題で、雛山は泣きそうな顔で雪永に助けを求めた。尻尾は力なく垂れ、耳は垂れている。

「では、雪永さんにここに座って貰って……それで撮ってみます？」

大きなリス尻尾をふわりと揺らし、エディターがにっこりと微笑む。

「雪永さんが恋人役ですか？ いやそれマズい！確かに大事な先輩で、俺にとって憧れの人ですが、いや、あんな堂々としたカッコイイ先輩をじっと見つめるなんて、俺、恥ずかしくてどうにかなりそうです！ 待って、ちょっと待って！心の準備をください！」

すでにどうにかなってるぞ、お前。気恥ずかしいヤツだな。

美形の男が、自分を見ては両手で顔を覆って焦っている。なんか可愛い。

「雛山ちゃんって、雪永さんのことが好きなのね。意識しちゃって可愛い」

「え！雪永さんは俺の先輩ですよ？そういう意味では好きですが、意識ってなんですか。それはちょっと違うでしょ。そうですよね？雪永さん！」

話を俺に振るな。

雛山は力強く尻尾を振って、メイク系の足を叩く。

「お前やめろ。何も意識なんかしてないからやめろ。人様を尻尾で叩くな」

「は、はい……」

雪永に諭されて、雛山はようやく大人しくなった。髪を整えられ、透明のリップを唇に塗って貰う。

「ほら、さっさと済ませるぞ」

「はい」

見つめられてばかりも癢(しゃく)なので見つめ返してやると、雛山の頬が赤くなる。カメラマンはすかさずシャッターを切り、エディターとメイク系は「素敵！」とはしゃいだ。

菓子を食べてるだけで絵になる男って、本当に凄いな。しかもそれ、一口アンドーナツだぞ？砂糖が服にも落ちてるし、唇(くちびる)にも砂糖が付いてるし。そこで笑うなんて、子供かよ。ほんと、可愛いなお前は。

見ているこっちまでつい微笑んでしまう。

カメラマンが撮った写真を確認しながら「視線の先にいるのは彼女というより母親か、もしくは妻って感じだな」と呟いていたが、雪永は聞かなかったことにした。

雛山の撮影と違い、自社製品についての取材や撮影は随分スムーズに進んだ。ハプニングと言ったら、途中、商品開発のメンバーが会議室を覗きに来たぐらいだ。

「お疲れ様でした。では、今度は場所をミナワビルに移して、お話の続きを伺(うかが)いたいと思います。引き続きよろしく申し上げます」

待て。なんだそれは。そんなこと、依頼メールにはひと言も書いてなかったぞ。

頬を引きつらせた雪永に気づいたエディターが、大きな尻尾で自分の体を巻き込むようにして「ミナワの企画室さんが、是非ヒロサキさんのお話も伺(うかが)いたいとのことでして……」と言った。

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>

『シッポの気持ちを聞いてみる』

「俺……スーツ姿で自社製品を持って笑っていればいいんですよね？」

雛山は汗をかいた手のひらを雪永に見せる。

「そんなに緊張してるのか。大丈夫だ、ちゃんとできる。綺麗な顔っていうのは、そこにあるだけで場が華やかになるからな」

「早く来ればいいのに、さっさと終わらせて帰りたい」

「俺は自社製品をめいっぱいアピールしたいな。特に俺が企画したヒット商品をな」  
雪永が自信満々に言ったところで、商品開発のメンバーが「会議室にお菓子を運んでおいたから」と言いに来てくれた。

女性ファッション雑誌のエディターは家系リスの女性だったが、カメラマンはガッシリとした体格の、家系ヒグマの男性だった。

どちらもある意味可愛いが、ロマンスが芽生えるような状況ではない。ついでに言う  
と、二人についてきたメイク係は家系クジャクの男性だった。

雪永は家系クジャクと会ったのは初めてだったので、「さすがはクジャクだな、いや、綺麗だ」と素直に感想を述べて、メイク係のお気に入りになってしまった。

「ほんと……雪永さんって可愛い。私、新人さんかと思ったら、雛山さんの先輩だなんて！その童顔を大事にしてね。可愛いわ」

童顔も可愛いも、雪永にとって地雷でしかなかったが、ここで怒って撮影を台無しにはできないので、ひたすら耐えた。

それに、今一番大変なのは雛山だ。

いくら美形だといっても、慣れないモデル撮影に四苦八苦している。

「もう少し自然に笑って」「新商品にワクワクする感じで」まではよかったが、「視線の先に恋人がいると思って」には顔を赤くして「え！」と聞き返した。

「それは、ちょっと無理」

カメラマンが求める自然な笑いがやっとできたと思ったのに、次に出されたのは難題で、雛山は泣きそうな顔で雪永に助けを求めた。尻尾は力なく垂れ、耳は垂れている。

「では、雪永さんにここに座って貰って……それで撮ってみます？」

大きな尻尾をふわりと揺らし、エディターがにっこりと微笑む。

「雪永さんが恋人役ですか？ いやそれマズい！ 確かに大事な先輩で、俺にとって憧れの人ですが、いや、あんな堂々としたカッコイイ先輩をじっと見つめるなんて、俺、恥ずかしくてどうにかなりそうです！ 待って、ちょっと待って！ 心の準備をください！」

すでにどうにかなってるぞ、お前。気恥ずかしいヤツだな。

美形の男が、自分を見ては両手で顔を覆って焦っている。なんか可愛い。

「雛山ちゃんって、雪永さんのことが好きなのね。意識しちゃって可愛い」

「え！ 雪永さんは俺の先輩ですよ？ そういう意味では好きですが、意識ってなんですか。それはちょっと違うでしょ。そうですよね？ 雪永さん！」

話を俺に振るな。

雛山は力強く尻尾を振って、メイク系の足を叩く。

「お前やめろ。何も意識なんかしてないからやめろ。人様を尻尾で叩くな」

「は、はい……」

雪永に諭されて、雛山はようやく大人しくなった。髪を整えられ、透明のリップを唇に塗って貰う。

「ほら、さっさと済ませるぞ」

「はい」

見つめられてばかりも癪(しゃく)なので見つめ返してやると、雛山の頬が赤くなる。カメラマンはすかさずシャッターを切り、エディターとメイク系は「素敵！」とはしゃいだ。

菓子を食べてるだけで絵になる男って、本当に凄いな。しかもそれ、一口アンドーナツだぞ？ 砂糖が服にも落ちてるし、唇(くちびる)にも砂糖が付いてるし。そこで笑うなんて、子供かよ。ほんと、可愛いなお前は。

見ているこっちまでつい微笑んでしまう。

カメラマンが撮った写真を確認しながら「視線の先にいるのは彼女というより母親か、もしくは妻って感じだな」と呟っていたが、雪永は聞かなかったことにした。

雛山の撮影と違い、自社製品についての取材や撮影は随分スムーズに進んだ。ハプニングと言ったら、途中、商品開発のメンバーが会議室を覗きに來たぐらいだ。

「お疲れ様でした。では、今度は場所をミナワビルに移して、お話の続きを伺(うかが)いたいと思います。引き続きよろしくお願ひします」

待て。なんだそれは。そんなこと、依頼メールにはひと言も書いてなかったぞ。

頬を引きつらせた雪永に気づいたエディターが、大きな尻尾で自分の体を巻き込むようにして「ミナワの企画室さんが、是非ヒロサキさんのお話も伺(うかが)いたいとのことでした……」と言った。

本文p58～68 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>

※試し読みの無断転載はご遠慮ください。